

■書評 Book Review

真正な短詩としての「世界俳句」

夏石番矢・世界俳句協会編『世界俳句 2011

第7号』七月堂二〇一一年一月二〇日発

行 一六〇〇円(税別) 一五米ドル 13

ユーロ ISBN978-4-87944-173-7C0092

Suketada SAKAI

酒井 佐忠

夏石番矢らが中心になり二〇〇〇年九月に世界俳句協会創立大会がスロヴェニアで開かれ、十二月に協会が正式スタートして昨年で十年がたった。創立にかかわる夏石の壮大な夢の実現にかける熱意を同時代的に見ていた私は、この十年という時間がもたらした着実な成果の前に、ただ感慨を深くする。壮大な夢は得てしまさに夢としてついえ、あるいはその設計を縮小して実現されることが多い。だが、いま分厚な『世界俳句2011・第7号』を読むと、世界の中の俳句の位置が、私たち日本の俳句関係者の想像を超えて高まっていることがわかる。

それはこの本への参加者の増大が物語る。二〇〇五年刊行の第一号は、二十一カ国一五二人でのスタートだったが、年々海外の大きな反響を呼び、第二号は二十七カ国、第三号は三十一カ国と少しづつ増え、今回は実に四十一カ国一八一人を数えた。ここで注目したのは、全体の人数の増加に比べ、参加国が増えていること。これは、国際俳句といえはまず欧米の大国と相場が決まっていたが、そうではなく、インド、タイ、モンゴル、セルビア、クロアチア、ラトヴィア、ブルガリア、エストニアからキューバまで、政争に揺れる小国も含めて地球のあらゆる方面に広がっているのは、国境を超え、民族を超え、母語を超え、ひたすらヒューマンな関係を求める夏石らの「越境的思考」の現れと見たい。

それでは彼らが目指す「世界俳句」とは何なのだろう。日本に固有の文芸と言われる俳句は、いまや「世界の俳句」として認識されている。その時、地球の西から東まで、さまざまな人たちにとらえられる「俳句」は、どのように理解されるのか。それを知るのには、この第七号に寄せられた「俳論」を読むといい。まず私が注目したのは、ジェイコブ・コピナ・アイアーメンサーによる「俳句における時間表現の評価」と題する論だ。筆者は、一九六八年生まれで国籍はガーナ。四〇

歳を過ぎたばかりの筆者の、俳句に対する冷静でかつ斬新な認識に驚かされる。

「俳句は、水の循環である」とアイアー・メンサーは言う。これは興味深い表現だ。俳句は多く瞬間を把握することを特長とするが、ただそれだけではない。瞬間の言語芸術であるばかりでなく、俳句の中の時間は、実は固定されていないことを指摘する。瞬間から永遠まで多彩な時間がこの世界最短の詩型の中に込められる。その時間を「滝のごとくダイナミック、もつといえば、水の循環のようだ。時間は過去から現在を通り、未来へと流れている」という。固定ではなく、循環する時間。その認識が俳句の出発点だと論者はいう。その循環性が一つの場所、あるいは規定された事実、固定された思考、安定的な観念などを排除し、自由に、また「夏石の形容」をすれば、越境性に富んだポエジーを生む原点なのである。

アシャンティ人形／崖は溶け込む／もとの海へ

この句は、第七号の作品欄にあるアイアー・メンサーの句。北アフリカのガーナにある「アシャンティ」は、ガーナの自然を生かした伝統的建築で世界遺産になっている。原始的なアフリカの人形も崖も、その生命の源である自由の海へ還っていく。この俳句をそのように読みとっていくと、彼が俳論で述べた「水の循環」としての俳句的時間が見事に作品でも表現され、私たちにさえ、北アフリカの原初の海が眼前になる。その海は過去から未来へ循環する水であることが、俳句によって認識される。これは「世界俳句」の一端でもある。

彼は俳句における季意識を基底にしながらも、俳句の未来は、「ある意味で詩作の指標から逸脱すること」に、そして新しい効果的な指標を用いることにかかっている」とし、さらに「ボヘミアンでなければ、俳人は自分の果たすべき役割を定義する指標を作り上げることができない」としている。つまり、俳人であるなら、逸脱性に富んだボヘミアンでなければならぬということだ。これだけを信ずるわけではないが、いま現在の日本の俳句という詩に欠けているのは、精神としての逸脱性とボヘミアンとしての放浪性ではないか。何も彼だけの論を取り上げるわけではない。インドで多彩な俳句出版活動をしているサ

ントシュ・クマールは、俳句における主題の必要性を説く。言語表現にはテーマあるいはモチーフがあるのが普通だ。だが、俳句や詩にはそのテーマないしモチーフは背景に秘されるか、あるいはまったく存在しない場合が多い。それが俳句の必然と考えられてもいる。だが、本当にそうだろうか。はっきりしたテーマ意識のある俳句があってもよいのではないか。「俳句と季語との関係という問題に答えを出そうとすると、我々は世界基準化された現代に住んでいることを思い出すべき」だとクマールはいう。それは何も、かつての社会性俳句のようなものを目指すことではない。このいかにも空無な、空虚な、それについて情報過多の組織社会の中に、現実には俳句の作者も生きている。そうした生命のバックグラウンドをテーマとする俳句はないか。そんなことをクマールは言っているのだろう。そうした視点も含め夏石は、「世界俳句」の概念を問いつつ進んだこの十年の成果を「創造的リンクとしての俳句」と題する論に総括的にまとめている。かつて夏石は、新たな提言として俳句における「キーワード」の有効性を提言したのは周知のことだ。だが今回、「世界俳句」の特色として「創造的リンク」に注目した。

静かな木／空は／君を揺り動かす

コールドウエル

痛み／そのなかに／無限

イヴォイロヴァ

十の季節／十の絶望的な季節／新月

アデセウ

たとえば一句目は、自然界の事物の間、事物と人間の間の新しいリンクを描いた「牧歌的俳句」。二句目は、「痛み」と「無限」がリンクし、新たな宇宙を創造する。そして三句目は、ナイジェリアの俳人により、これまで慣れ親しんだ四季とはまったく別のアフリカの気候と「新月」との精神的リンクにより、これまでの「日本俳句」が経験したことのない創造的地平を生み出していると、夏石は指摘する。とりわけ三句目の「絶望的な季節」というとらえ方に注目したい。ここには季節に対する親和的な安定はない。「花鳥諷詠」の温和性もない。

「リンクとは、安定した関係ではなく、既存のコンビネーションでもなく、俳人が俳句と呼ばれる真正の短詩を創作したときにはじ

めて見つけ出せる、密かで潜在的な架け橋である。」と夏石は書く。気持ちのいい言説ではないか。この言葉こそ、「解放された宇宙に読者を自由に運ぶ」新たな「世界俳句」の概念であろう。「俳句とは何か」と長く問いつづけ、夢と情熱を触媒に、誠にナゾに満ちた俳句という不思議な詩型を追いつづけた俳人が、いま行きついた一つの指標といってもいい。俳句はまさに、多種多様の、不安定ゆえに魅力的に宇宙を駆けめぐる言葉と自然、言葉と事物、言葉と人間の間を関係を示すものにほかならない。

こうした示唆に富んだ俳論のほか、第七号の一卷には一人三句の作品発表、「世界俳句フェスティバル・ペーチ二〇一〇」などの大会報告、日本とニュージールランドのジュニア俳句の紹介など多彩な内容。その中で「世界俳画ギャラリー」が面白い。「俳画」といえば、たとえば墨絵による風雅な絵、あるいは正岡子規の糸瓜の絵などが想像されるが、ここに描かれたものはそのように「安定した関係」にある絵画ではない。〈そして老母／子の帰りを待つ／幼いころの家／の句に添えられた俳画は、人生の悲哀と辛苦を知り尽くした老母の目が印象的だ。また、〈冬の敷居／古いドアを／誰も開けていないようだ〉に添えた画面から、固く閉められたドアの拒絶感が伝わる。そうした絵に、これまでの「俳画」のイメージは払拭され、句と絵画あるいは写真との「不安定なリンク」が、見たものの内部に秘められた新たな感情を触発する。

ところで今年は四月二十九日に第六回世界俳句協会日本総会の開催が予定されるなど、協会創立十年の節目を超えた新たなスタートが切られた。夏石らが目指す「世界俳句」は当初の予想を超えて着実な進展を見せているのだが、なぜ夏石がこれほどまでに「世界俳句」に詩の魂をかけるのか、といま私は問うている。すると古い話だが、彼が一九九五年に編纂した好著『「俳句」百年の問い』（講談社学芸文庫）の解説に立ち戻る。

その中で彼は、近現代の俳句の歴史の成果が、根幹から問い直されるとき、「俳句とは何か」という問いに教科書的な答えを出すのではなく、何が「俳句」という謎に満ちた短詩型の詩的原理をより深くえぐり出しているか」というシビアな目が大切だと指摘する。そして俳句の独特で奇蹟的なありようが、世界文学の「強力な発想供給源」と「刺激剤」になり得ると確信している。不思議な魅力をた

たえた俳句という多面体の新たな詩的原理を
探るため、夏石は「世界俳句」の可能性に挑
戦し続けているのだと思う。